建てる裏門●我等の學院●教頭寮等を背景に、躍るが如き松の潔く夜景を飾りたる有樣はまるで油繪の樣である。

淡墨もて描いた樣なる遠山の彼方に、幽に見えたる白雲は長く〳〵長蛇の如くなつては、蜿蜒迂曲して次第〳〵に山を取卷き谷を埋め、見る間に雲海を生じ覺林坊の燈も灰色につゝまれた。

池の鯉は逃げ去り星墜ちて水面緋の如く堂前の燈籠は、折しも一しきりの風に嬉しさうに搖れて動く……。

秋の歡喜

高橋是明

故人は秋を悲しいものゝ樣に謂つて來ました。が、自分は最も秋を喜ぶのです。月の光、虫の音、秋の寂しさの中に溫味を包んでゐます。哀れなるが中に樂しさが含れてゐます。決して悲觀すべきものではないと思ひ、且信じて居るのです。蕭條とか、寂寞とか好んで陰氣な文字を使つて、秋を寂しい樣に謂ひ、悲しいものゝ樣に嘆ずるのは陳腐です。又月並です。

天は高く氣は澄む、今迄の暑さに蕩けた身體も、金風一度肌膚を吹くと、肉が緊つて來ます。骨が硬くなつて來ます。そして、其處に新らしい血が潮のやうに湧いて來るのです。青春の氣が身體中に充ち溢れて、泰山崩れよ、北海荒れよ、物の數かは、我に戰ふべき準備と力と、武器とがある、いざ、一番と腕を叩いて躍り出したくなります。

秋の自然程自分を樂しませるものは、ありません。山の姿や、端麗、水之流れや、清澄、野には可憐の小

草が錦の褥を織り、虫聲唧々秋の歌を謠つてゐるのです。造化は自分等を樂まさせるべく、こゝに秋と云ふ清涼の好季を與へ、たまはつたのではありませんか。それに對して徒らに悲しむのは、禮を盡したものといへませう。

憂ある人よ、悲しむの人よ、將に又歎き煩ふの人よ、心を平かにして清涼の天と、靜寂の野に、嘯けそして無邊大なる、天地と、同化せよ其處に卿は慰を得るのであらう、同情を與へられるであらう。斬うして卿の憂ひ、卿の悲しみ、卿の歎のき煩ひは、拭はれ散ぜらるゝに相違無い。そして秋の樂しさを、しみ〴〵と思ひ感じ、味はされるに相違無いと思ひます。

我々一同は此の時節に臨みて學びの海にと漕出でゝ亦も再び漕行くのであります。

魂の叫び

中林良陽

童等小流より鮒を捕へ來りて將に炮らむとするに、彼れ尙泡を吹いて依然たり。ああ、鮒や鮒や、汝うつせみの世に生れながら、世を憂きものとも觀じやらで、ひと瞬の間も猶生を貪らむとはするか。さても幸の極なるよ。

げに世は果敢なきものなりき。釋迦や彼れ、無上正覺を成じて法身の常住を叫ぶと雖も、沙羅双樹の花の色は、遂に遷りにしを奈何。奈翁や彼れ、盛名を吏典を殘すとも、セント●ヘレナの白露は、遂に消え失せぬるを奈何。おゝ果敢なの人の世や、斯くて我れ何處より來り、何處へ去らむとはするぞ。

我れ嘗て富士の高嶺に登りき。登りて大いなる自然に接したりき。嗚呼、山や空や永しへに依然として變